

27AB-pm306

初年次薬学入門実習がその後の学業成績に及ぼす影響についての基礎検討
○武田 直仁¹, 川村 智子¹, 谷野 秀雄¹, 田口 忠緒¹ (¹名城大薬)

(目的) 初年次に実施する薬学入門実習で感じた薬学への興味関心や学習意欲の多寡が高学年次の学業成績に及ぼす影響を追跡調査することで、早期に学生支援する方策についての知見を得る。

(方法) 物理、生物、分析、化学系の 4 回の入門実験後、実験内容の理解度や学生の意識に関するアンケート (約 20 項目) を 5 件法で実施し、否定的評価 (1, 2) をつけた低評価群とすべての質問に評価 1, 2 を含まない高評価群間で、その後の学業成績に差異があるのかを調べた。

(結果・考察) 平成 23 年度から 26 年度にわたって、低評価群と高評価群において、1. 留年未経験者の比率、2. 退学者の比率、3. 留年経験者の比率に差があるかを調べたが、平成 23 年度の留年経験者の比率にのみ差 ($p=0.049$) が認められた。また 6 質問以上で、評価 1 または 2 をつけた自己評価低群と評価 3 以上の自己評価高群において、2 年次終了時の履修科目の平均点と学年順位を調べた。平成 23 年度の学年順位において低評価群は高評価群に比べ順位が下位にある傾向が示された ($t(155), p=0.064$) が、他の年度には有意な差は認められなかった。今回の基礎検討では学生の自己評価は必ずしも学業成績を反映しているものではないことが示唆された。実際、「入門実験の前後でかえって薬学への興味を失くした。」と答えた学生のうち、多くは学習意欲を維持し進級している。一方、初年次に大学に溶け込めなかった学生は、1 年次に退学している。今後、どの質問項目が学生の成績に関連するのか調べる予定である。